

## 第2章 現代の卡地布小米収穫祭

知本相撲はそれが実修される場である収穫祭との関連においてその意味を表しており、また、収穫祭は知本において重要な位置を占めている。したがって、知本相撲を的確に理解するために収穫祭の全体像の把握は何よりも欠かせないものである。

よって本章では、はじめに参与観察をおこなった2004年及び2005年「卡地布小米収穫祭」の全体の流れを、次いで知本相撲について詳述する。

### 1 収穫祭

今日、知本の収穫祭は国語（漢語）では「卡地布小米収穫祭」、カティプル語ではアルファベットを用いて「KATATIPUL Ka-VaLasaan」と表記される。「卡地布<sup>1</sup>」とは知本の歴史的名称であるカタティプル、またはカティプルの漢語表記であり、「固有伝統文化<sup>2</sup>」を意識する際に特に用いられる。また、「小米」とは、かつて彼らの農耕生活を支える基盤であった粟の漢語表記である。二期作の粟生産過程に伴うさまざまな祭祀儀礼のうち、最初の収穫に関わる年中行事<sup>3</sup>を「カバラサアーン」、または「ブナラサ」と呼ぶ。ブナラサとは石のように重くぎっしりと稔った粟穂の意味であり、豊穰観念を表している。知本日本語では「収穫祭」、もしくは「粟祭」とも呼ぶ。

「2004 卡地布小米収穫祭」（以下、収穫祭という）及び「2005 収穫祭」は台東県卡地布文化発展協会（以下、文化発展協会という）が主催しておこなわれた。実際的な担い手は卡地布部落青年会<sup>4</sup>（以下、青年会という）であり、これに卡地布部落婦女会（以下、婦女会という）が協力している。運営組織である文化発展協会については、第4章で改めて論じる。

収穫祭は、今日ではこのように公の組織が運営主体となり、トウモクは「パ

<sup>1</sup> カティプルの初出はオランダ統治時代の1642年であるとされる。

<sup>2</sup> 文化発展協会「章程」に「固有伝統文化」の文言がみられる。詳しくは、第4章3を参照。

<sup>3</sup> 本研究では、多種多様な祭祀儀礼を包括するもっとも総括的な言葉として「年中行事」を用いる。

<sup>4</sup> 兵役を終えた年代から30歳位までの知本プヌマ男子の有志によって構成される。

リシ<sup>5</sup>」(伝統的祭祀)に関わる部分のみを執り行っているが、かつては粟の播種から間引き、収穫、食用に至るまで、生産過程に伴うさまざまな祭祀一切をトウモクが全て取り仕切りっておこなっていた。トウモクが祭祀をおこなわれなければ、粟生産に係わるすべての作業、そして食べることも一切許されなかった。トウモクによる祭祀について論じることは本研究の目的ではないので、ここでは収穫祭の理解にとって重要と思われる祭祀のみを概略する。

収穫祭の運営経費は知本プユマー家族あたり500元<sup>6</sup>を徴収するとともに、台東州政府や台東市の首長・議員など政治的地位にある人からの寄付に多くを依っている。寄付は公職選挙を控えた時には高額となる反面、選挙の実施されない時には少なく、文化発展協会は資金繰りに苦心している。

収穫祭は「卡地布多功能活動中心」を会場にして開催される。卡地布多功能活動中心には文化発展協会の本部がおかれ、知本の社会・文化活動の拠点となっている。この地は日本統治時代には知本公学校(1941年から知本国民学校)があり<sup>7</sup>、第二次世界大戦後はそのまま中華民国の知本国民学校(現在の国民小学)に引き継がれ、1949年に移転するまで学校があった。その後、荒地となっていた場所を文化発展協会が1990年代に政府より払い下げと補助金を受け、「卡地布部落文化園區」として徐々に環境を整備してきている(写真4)。

この地は、日本語世代にとっては日本統治時代の「記憶」が集約されている場でもある。

卡地布多功能活動中心には、漢語で「把拉冠」と表記されるパラクワンが復元されていることから、知本ではもっぱらパラクワンと呼ばれる(写真5)。よって、知本においてパラクワンとは狭義では男子集会所の建物を指し、広義にはそれが置かれている土地や空間を含めた総称として用いられている。

収穫祭は毎年7月11日から18日まで、8日間にわたっておこなわれている。

<sup>5</sup> 知本日本語では「まじない」という。

<sup>6</sup> 日本円で約1700円(2005年7月現在)であるが、物価の問題、または知本の経済状況により単純には比較できない。

<sup>7</sup> 日本から運ばれた檜によって切妻屋根の玄関をもつ校舎が建てられていた。戦後、進駐してきた国府軍の兵舎となったが、不審火により消失。近年まで公学校時代の国旗掲揚台(写真6)が残されていたが、2004年のパラクワン整備にともなって撤去された。「記念だから残してくれっていったのだけど」とは汪先生の弁。

以下、この期間に実施された行事を時間軸に沿って詳述する。

### 【7月11日】

第1日目。文化発展協会の役職者、青年会員、知本プユマの高級中学、国民中学、国民小学（それぞれ日本の高校生、中学生、小学生に相当）の生徒・児童がパラクワンに参集し、文化発展協会総幹事、青年会長の指示のもとに準備を始める。

また、この日より期間中（7月17日朝まで）、知本プユマの高級中学生、国民中学生、国民小学生はパラクワンに泊り込み、スパルタ式訓練を伴う集団生活をおこなう<sup>8</sup>。精進潔斎など特に禁忌はない。また、参加は個人の自由意思に委ねられており、興味・関心が無い場合には参加しないこともある。「夏休み期間の子どもたちはみんな楽しみにしている」（汪先生）一方で、少なからず不参加があることもまた事実である。

泊まり込んでいる彼らの食事<sup>9</sup>の支度は婦女会長が中心となって準備にあたり、2005年は「原住民文化」のフィールドワークに訪れた女子学生の一団がサポートしていた。パラクワンの建物自体は女人禁制であるものの、そこを一步出たパラクワンの敷地には少なからず同年齢の女性がおおり、平服でジャージ姿の青年男女が談笑する様相はむしろ和やかな雰囲気をかもし出しており、一見するとサークル・課外活動の合宿訓練のようでもある。

夜には日本語世代など、年長者による卡地布の歴史や文化に関する講話がおこなわれる。

### 【7月12日】

第2日目。早朝、パラクワンで集団生活中の高級中学生、国民中学生、国民小学生が上半身裸となり、2列縦隊を組み走って集落を巡回する。この際、高級中学生、国民中学生は左手にブリキで出来た細長い鐘を、右手に木製のバチを持ち、調子を合わせて叩きながら走る。これは走ることによる心身の鍛錬としての意味合いの他、収穫祭が近づいたことを知らせるものであり、この鐘の

<sup>8</sup> 広報媒体などにも「斯巴達式軍事訓練」として特に強調されている。

<sup>9</sup> 期間中の食事に供するために、ブタ2頭を購入し、同地で屠り解体した。

音は収穫祭の風物詩ともなっている（写真7）。

鐘の音について、汪先生は語る。

今はただ叩いているだけだけど、昔は鐘の音の高低がもっとはっきりしていた。部落間のいざこざも（話し合いではなく）鐘を鳴らしてのやりとりで解決していた。他の部落へ伝令として走らせたときも、(伝統的衣装の)腰に付けている鈴（写真8）の音を耳にすれば、話しを聞かなくともどこの部落のものか、悲しい知らせかそれとも嬉しい知らせかどうかわかったものだ。今の子どもたちはそんなこと知らないし、出来ない。

この日は、「タリヌグ<sup>10</sup>」（写真9, 10）をパラクワンに掲げ立てることが重要な行事である。タリヌグとは藁や竹、檳榔などで人形を作り、それを一本竹の先に付けて掲げ建てることである。これには2つの意味がある、一つは収穫祭の始まりを告げること。集落内はもとより、発祥神話では姉の子孫にあたり、山側に遠望する位置にある建和集落に「収穫祭が始まるから、今年も遊びにきなさい」と知らせる意味もあった。二つ目として、かつては知本には3系統それぞれのパワクワンがあり、流木集め競争、相撲の対抗戦がおこなわれていた。これに勝利したパラクワンが立てることを許された勇者の証でもあった。

タリヌグは青年会員、高級中学生、国民中学生らによって作られ、意匠も任されている。板に絵を描いたり、藁人形に着物を着せたり、裸のままであったりと年によって様々であるが、特徴としては発祥神話で弟の子孫といわれているため、男性のシンボルをことさらに誇張させた姿となっている。

人形を作り、知本山の麓から切り出してきた竹に付けて掲げる頃には日暮れを迎えている。竹を立てる際にはトウモクによるパリシがおこなわれる。

夕方には、朝と同様に高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回し、夜には収穫祭の由来の講話や伝統歌謡の練習がおこなわれる。

## 【7月13日】

<sup>10</sup> 漢語表記「精神圖騰」。

第3日目。前日と同じく早朝に高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回する。彼らはこの日断食するとともに、唐辛子入りの水を飲み、ニンニクの汁を唇に塗布される試練に耐えなければならない<sup>11</sup>。また、各家においても収穫祭に向けての準備が始まる。「ピナルポック<sup>12</sup>」(米餅)を作るために必要な月桃の葉などを山野に採集に行く。

午後は、パラクワンで会場設営にあたる。夕方には、高級中学生以下が鐘を叩きながら、そして、青年会の軽トラックが「青年会伝唱歌謡<sup>13</sup>」を拡声器から流しながら集落を巡回し、収穫祭のはじまりを知らせる。集落の人々は戸外で夕涼みしており、この鐘と街宣によって、収穫祭の訪れを実感する。

夜には、明日からの本格的な祭に向けての訓話や伝統歌謡の練習がおこなわれる。また、期間中の夜には、パラクワンにてスパルタ式訓練の一環として、寝かせた国民中学生の尻を木の棒で力強く叩くこともおこなわれる。これはかつて、伝統的年齢階梯制における通過儀礼の一つであった。

### 【7月14日】

第4日目。この日から本格的な収穫祭を迎え、主要な行事が執り行われる。2004年、一日の始まりに汪先生は「祖先を敬う、団結、感謝」の3項目を大切にするように青年たちに語った。

はじめに「馬拉松体能競賽」(漢語)である。カティプル語では「ブンカス」であるが、今日のこのように呼ばれることはなく、もっぱら「マラソン」という。パラクワンから発祥地とされるルブアーンまで、高級中学生、国民中学生、国民小学生が徒競走をおこなう。距離は往復で5から6キロメートル程度である。海岸沿いのなだらかな舗装道路が続くが、台東と高雄を結ぶ幹線道路でもあり、大型車や時速100キロ以上の自動車の往来が多いため、青年会員や保護者などがオートバイや自動車にて伴走し、交差点などでは交通誘導に務めサポートする(写真11)。

2004年はパラクワンからルブアーンまでの全行程を走る訳ではなかった。午

<sup>11</sup> 台東県卡地布文化發展協會(2005)卡地布小米収穫祭。

<sup>12</sup> 漢語表記「卑南粿」。

<sup>13</sup> 知本プユマが中心となって結成された音楽ユニット「原住民部落工作隊」によって、CD化され、一般にも販売もされている。

前6時にパラクワンをスタートし、1キロメートルほど走った後に指示に従って伴走のトラックの荷台に乗り込み移動した。そして、ルブアーンの手前で自動車から飛び降り、再び走り出してルブアーンまでの僅かな距離を走ってゴールした。実際に走る距離よりも、自動車で移動した距離の方が長いという徒競走であった。これについて、トウモクの鳥井氏は言う。

以前はパラクワンで7日から1週間の断食をして、それから走っていたが、断食も今は一日だけ。それもやっているか？（以前は）4時にスタートして、パラクワンまで走って行って、向こうで相撲をとっていた。その帰りが正式の競走で1着から3着までを決めていた。

というのはね、（全行程を走らせないのは）今の子どもは体力がないから走らせられない。だから自動車に乗せている。事故があるといけないから。裁判になるとトウモクでも（公権力には）かなわない。台湾はすぐに裁判にするから。

一見すると、走る速さを競うという本来的な意味での徒競走とはかけ離れた行為にも映るが、これをおこなう意味が「競争」よりもむしろ「固有伝統文化」を「経験」させることにその重きがおかれていることを教える。

ところが、2005年ではこのマラソンの様相が一変した。パラクワンをスタートした後、自動車に乗り込むこと無くルブアーンまで完走したのである。国民小学生、国民中学生は往路のみの競走であったが、高級中学生にはさらに帰路も走ってパラクワンに戻らせ、着順を決めて上位を表彰した。このように、マラソンにおける自動車での移動を止め、実際に走らせたことは「固有伝統文化」としての真正性を高めるものであったとみることができる。

往路、到着したルブアーンでは、2004年は年長者から発祥伝承が記されている石碑（写真12）についての説明がなされただけであったが、2005年は青年会によって砂浜でトレーニングを兼ねたレクリエーションがおこなわれた。これも年によって異なり、綱引きがおこなわれたこともあった。

午後からはパラクワンにて男子による知本相撲がおこなわれるが、これについては次節で改めて述べることにする。

夜は、卡地布多功能活動中心に女性が参集して花環作成に取り組む。漢語で「花環及編花競技」と表記されるものの、実際は競って作るというより、むしろ大人が子どもを指導しながら一緒になって作成する。これは、収穫祭における「固有伝統文化」の女性による継承とみることができる。この花環は収穫祭や狩猟祭など、ハレの祭祀儀礼の際に女性から男性に贈られ、頭を飾るものである（写真13）。

### 【7月15日】

第5日目。早朝、高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回する。午前中、各家より定められた個数の餅、ビール、米酒などがパラクワンに納められる。これらは期間中に会場で振舞われる。原則的に物納であるが、現金でこれに代える事も出来る。かつては青年たちが一軒一軒まわりを回りもち米を、無ければ粳米を集め、もち米は餅に、粳米からは米酒を造っていた。

昼には「伝統年齢階級餐会」（漢語）が催される。伝統的衣装<sup>14</sup>で正装し、腰に「蕃刀<sup>15</sup>」を下げた日本語世代や大人がパラクワンに集まり、年代ごとに食卓を分けて食事をする。知本社会において、文化として価値づけられている規範的行動の一つに年長者を絶対的に敬うということがあげられる。食事会においても、高級中学生、国民中学生などは大人の接待にまわる。

午後は、伝統的衣装の青年会員、高級中学生、国民中学生、国民小学生が「精神舞」（漢語）にて集落を巡回する。パラクワン建物の入り口に下げてある人形の鐘を先頭にして打ち鳴らしながら（写真14）、年長者から長幼の順で隊列を組み踊りながら進む。右手に大きな葉を持ち、左手に卡地布の色である黄色のタオルを持ち、両手を前後に大きくゆっくり振りながら、大股で腰を落として歌いながら進む。カティプル語で「プトガル」と呼ばれるこの踊り方は、まだ山麓に居住していた時代に、収穫した粟を担いで山へ運んだ姿を表しているという（写真15）。

知本集落の路地をくまなく巡るが、途中、前方で爆竹が打ち鳴らされるとそ

<sup>14</sup> 今日では布に刺繍で装飾が施されたものとなっているが、かつては鹿皮で出来ていた。

<sup>15</sup> 知本日本語で「蕃刀」（ばんとう）、あるいは「刀」（かたな）という。木や竹の加工・細工に、または肉を加工したりと、利便性が高く実用的なものである。

ここで前進を止め横隊となり、両手を前で交差させ左右の人と手を繋ぎ円陣を組み、左回りに回りながら踊る（写真16）。歌いながら数週廻り踊ると、青年会長の独唱となり、全員で掛け声を掛けながら、一端しゃがみ込むように低く腰を落とし、それから高く跳ね上がる（写真17）。この跳躍を数回繰り返して一区切りとなる。餅や米酒、ビールなどでもてなす家もある。音楽は付き随うトラックに備え付けられたスピーカーから大音量で流されている。

汪先生はこの精神舞に目を遣りながら語った。

今は爆竹が鳴ったところで休んでおるけどね、爆竹は中国になってから、中国の影響でこうなった。日本当時は部落中を休むことなく黙々と廻っていた。踊り方ももっとぐっと腰を落として、地面に着くくらいまで、そこから跳ね上がっていたよ。歩くのではなく、跳んで部落を廻っていた。だから、非常に疲れた。それに比べて今は。みんな中国の影響。

爆竹は光復<sup>16</sup>後における「中国化」の影響として、また、ここでもマラソンと同様に実体験と重ね合わせての身体動作の簡略化を嘆く語りが聞かれる。

精神舞が集落の巡回を続けるなか、パラクワンでは晚餐会の準備が始まる。午後6時30分、数百人分の円卓が用意されたパラクワンには、知本プユマや来訪者が年齢別あるいは家ごとに着席し会食となる。パラクワンの空いたスペースには舞台やぐらが生まれ、婦女会有志による舞踊の披露やのど自慢大会が繰り広げられる。この晚餐会は「日本の正月と同じ。今日は知本の正月」と形容される。料理が無くなり次第、三々五々家路に着く<sup>17</sup>。

午後8時頃からは、ライトで照らされているパラクワンの広場で招待された人も一緒になっての大人から子どもまで男女一緒の踊りの輪が出来き、夜更けまで続く。音楽は先のCDがスピーカーで流される。また、踊りがおこなわれ

<sup>16</sup> 漢語で自民族の土地・人民を取り戻すこと。祖国復帰。

<sup>17</sup> 2004年の翌朝、日本語世代から語りかけられた。「(晚餐会で)食事を残したり、酒を捨てる人がいた。食事を残しても捨ててしまう。昔はこんなこと無かった。日頃は節約して、收穫祭の時に…。肉串1本でもごちそうで、酒を飲んだ。今は金持ちになったが…。日本はそうではないだろ」。そこには現実と過去(日本統治時代)を対比させ、現実を否定する一方、理想としての過去をみる眼差しが存在していることを教える。



る夜には、パワクワン脇の公道 50 メートルほどに露天が立ち並ぶ。

### 【7月16日】

第6日目。早朝に高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回する。

午前、トウモクが栗餅を作り、それを祖霊に供えるパリシがおこなわれる。カルマアンで栗餅を作り（写真18）、それを持って知本溪に行き、はじめに山に向かって狩猟の感謝を、次いで川にて栗餅を「船」に乗せ流し、知本溪が流れ注ぐ先に位置する火焼島（現、緑島）へ送り届ける。これは、栗が火焼島から伝来してきたという伝承に基づくものである。もともとは川海老を捕まえて、その触覚に栗をつけておこなうものであったが、今日では木の枝と米酒のペットボトルで代用している（写真19）<sup>18</sup>。これを川に流し、トゥマラマウ（呪文）を唱える。

午後からは精神舞の温泉街巡行がおこなわれる。日本統治時代からの保養地として名高い知本温泉は、知本集落よりやや奥まった知本山の麓に位置している。近年では、日本からも多くの観光客が訪れ、RCホテルは台湾でも屈指の集客力と賑わいで知られている<sup>19</sup>。知本温泉は知本溪に沿って温泉旅館や飲食店が温泉街を形成しており、知本の人々にとってはそこで働くことが数少ない現金収入の道となっているとともに、「温泉で働いている」ことが一種のステータスとなっている感さえある。

午後4時30分、青年会員、高級中学生、国民中学生が乗用車、オートバイ、トラックに分乗して、拡声器から伝統歌唱を流す車を先導にしてパラクワンを出発して温泉街へ向かう（写真20）。途中、温泉の手前にある知本プユマの新興住宅地に立ち寄り精神舞を踊る。温泉街に着くと原住民が経営している原住民料理のレストランの前で踊り（写真21）、すぐにまた元の道を引き返し、別の新興住宅地で踊る。かつてはRCホテルまで行き踊っていたこともあったが、2005年は温泉街の入り口までであり、温泉街巡行という趣旨においては形骸化している。「温泉から来てくれと言われていて、行くと喜ばれるから」と建前では観

<sup>18</sup> この下流で水量のほとんどが農地灌漑用に取水され、川の流れは途絶える。これによって、かつては生き物の豊富な河川であったが、今日ではまったく見られなくなっている。

<sup>19</sup> しかし、一頃の国内旅行のブームが去り、台湾人観光客は「大陸や日本へ行ってしまつて」寂れた感が否めない。

光のためとしているものの、寄附を得るため、あるいは寄附を受けての形ばかりのお礼巡行としておこなっていると推測される。

よって、この温泉街巡行は温泉街あるいは観光客という客体を意識してのものではなく、温泉の方まで広がった集落全体を巡行するため、すなわち知本プユマ自身のためにおこなわれているといえる。

夜には、パラクワンにて伝統的舞踊や歌が披露される。台北に居住あるいは出稼ぎに出ている知本プユマも帰省し、その友達なども集い、伝統的衣装での踊りの輪のなかに平服姿も入り交じって夜更けまで踊る。

### 【7月17日】

第7日目。早朝に高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回する以外、日中は特に行事はない。

夜から翌朝まで夜通し歌い踊り、収穫祭はフィナーレを迎える。夕刻より、伝統的衣装に身を包んだ人々がパラクワンに集まり、男女一緒での舞踊がおこなわれる。午後9時頃になると、カルマアンの前で各系統（マバリユウ、パカロク、ルバニャオ）に分かれて餅つきがはじまる（写真22）。若者が手杵（柄の無い杵）と臼で蒸したもち米をつき、女性がそれを丸め、きなこをまぶす。ついた餅は配られ空腹を満たすほかお土産ともなる。この餅は吉祥物として扱われている。

餅をつき終わると、夜が明けるまでの歌唱が続く。年長者、特に女性はこの機会を楽しみにしており、日暮れ前から子や孫に簡易ベッドを兼ねるイスを運び込ませ、席の確保をさせている。そして、このベッドに座り、時々睡眠をとりながら歌い楽しむ。伝統的な歌が歌われる機会は多くないため、記録化のために歌う女性を取り囲みテープレコーダーを回す知本プユマも少なくない。

伝統的な歌の独唱、そして歌垣のようにある特定のメロディーを声の高さで競い合いながら互いにやり取りすることも続く。伝統的な歌ばかりでなく、2004年では未明の数時間が日本統治時代の歌の数々「知本温泉の歌」、「(高砂) 義勇隊で出征する時に歌った歌」や当時の流行歌の歌合戦状態となった。その間、高級中学生、国民中学生は竹筒に入った米酒や水を注いでまわるなど、年長者の接待に心を砕く。空が白み始まる頃には、宴も自然散会となる。

2005年は未明に台風の接近が予想されたが、幸いにも直撃を免れた。「トウモクがパリシをしたから大丈夫」ということであったが、事実、太平洋上を西進して台東に向かっていた台風は上陸寸前で急転回し北へ進路を変えていた<sup>20</sup>。

7月18日、夜が明けるとトウモクは収穫祭を無事に終えたことを祖霊に報告、感謝するパリシをおこなう。その後、パラクワンの後片付け、清掃を終えると8日間続いた収穫祭は全ての行事を終える。

なお、2005年の大きな変化として、青年会主催のロックコンサートが催されたことがあげられる。7月18日、餅つきを終えた午後11時頃、突如、それまで暗かった特設ステージに強烈なライトが当てられると、伝統的衣装の知本プユマの若者たちによるロックが大音量で流れ始め、彼らの友人たちもステージの上下で歌い踊った。この間、歌い踊る若者たち以外の年長者はそれをただ眺めるか、もしくは仮眠をとっているかであった。この企画は収穫祭の準備会議で承認を得ており、知本プユマの若者たちによる、彼らにとっての「文化」の表象とみることができよう。

このロックコンサートが「固有伝統文化」としての収穫祭を否定する意図によるものではないことは、終了予定の午前1時にピタリと終わると、若者たちは再びカルマアンの前に集まり、伝統的な歌唱が再開されたことが物語っている。

また、2005年の収穫祭期間中、高級中学生以下によって、適時パラクワンの清掃がなされた。これは、前年に次のような批判があったことと無関係ではないであろう。

祭の時にはワイワイやるが、済んだら片付けない。いくらパラクワンを

---

<sup>20</sup> この暴風雨は甚大な被害を及ぼした。後日、次のような語りがあった。

「30年前にも大暴風雨があり、田畑が持っていかれた（水に浸かって流された）。それを国民党が没収し、外省人に与えた。だから、原住民は貧乏。測量すると言って騙されて取られたこともある」。

「イナバ先生が亡くなった時も、ここ（知本）から大南までの橋を全部流した。カワムラ先生が亡くなった時も、温泉の橋、この辺りの橋を全部流した。みんな日本が作ったもの。中国にあげたくなかったんだって、みんなで話したよ（二人は原住民として始めて師範学校を卒業した名士的存在）」「中国じゃない、シナだ。一緒じゃない」。

つくったって、それじゃだめだ。注意すると反抗する。昔はトウモクが一  
言言えば、すぐに掃除したが。今のトウモクが言っても。

## 2 知本相撲

### (1) 知本相撲の実際

前節では収穫祭全体をみてきたが、本節では2005年収穫祭における「知本相撲」を実際の流れに沿って時間軸でもって詳述する。なお、知本相撲とは知本の収穫祭にて実修されている相撲を分析するために、筆者が立てた作業概念である。相撲という言葉を用いるのは、他ならぬ彼ら自身が知本日本語で「スモウ」(相撲)と表現することによる。収穫祭における正式名称は国語(漢語)で「摔角競技」である。

知本相撲を記述するにあたっては、競技特性やそれに伴う運動形態が類似する日本の相撲(以下、日本相撲とする)の諸概念を援用する。

知本相撲は7月14日の午後4時頃からパラクワンにておこなわれた。北回帰線の南側に位置する知本では真夏の陽射しは痛いほどである。人々の生活習慣も昼下がりの数時間は昼寝をして活動しない。よって、昼寝を終えてから三々五々パラクワンに集めた頃を見はからっておこなわれた。

試合場は円形で、砂によって直径約6メートル、高さ約30センチメートルほどに築かれている。一年のうちでこの時しか使用しないために表面が固まり荒れているため、事前に鍬やスコップで掘り起こして軟らかく整地しておく(写真23)。表面は突き固めずに軟らかなままとし、踝位まで砂に沈みこむ状態とする。2004年にケガ人が出た時「土俵が固いからだ」という意見があったことから、表面は軟らかいほうがよいとされていると思われる。

2004年は試合場の東側、2005年は西側に観衆席が設けられ、結果的にその方角が正面となった。観衆席だけでなく、試合場の周囲にも観衆の人垣が取り囲む。

進行を取り仕切るのは青年会であり、運営方法はマニュアル化され継承されている。競技は国民小学生から年齢順に実施され、審判は青年会員、もしくは

有志の大人が務める。

開会に先立ち、試合場の上でトウモクによるパリシ（伝統的祭祀）が執り行われる（写真24）。パリシは時間にして約5分ほどである。

はじめに国民小学生の試合である。平服のまま上半身だけ裸、裸足となっておこなう。20名ほどが2組に分かれて、試合場の中央に向き合うように整列し、正面と互いに立礼を交わし、次いで握手する（写真25）。

対戦する両選手は試合場の中央に立つ審判に招かれて入場する。日本相撲の四股、またはそれに類似する身体動作はみられない。レスリングのように、審判の左右に選手が並び正面に礼をする（写真26）。仕切りは両足を広げずにほぼ肩幅のままで、握り拳を身体の前方の地面に着けた状態で静止する。日本相撲のように一端腰を下ろし蹲踞した後に仕切るのではなく、立ち姿勢からそのまま前傾して、拳を地面に着ける。日本相撲の仕切りとは異なり、ほとんど膝を曲げることのない、いわゆる腰高の姿勢である（写真27）。特徴的なことは、審判が仕切った状態の両者の頭が接するように互いの身体を歩み寄せ近づけることである（写真28）。そして、審判が「カマエテ」と声を掛けながら、広げた掌を正面に指し出し、「ハジメ」と発声しながら手前に引くことによって始めとなる（写真29）。

試合展開は互いに指を組み合わせたり、相手の脚にタックルしたり、押したり、引いたり、あるいは左右に振ったりして相手を倒す。相手を完全に倒せば勝ちとなる。どちらかの選手が円形の試合場から外に出てしまった場合には審判の指示によって再度、試合場の中央から始める。3本勝負で競い、先に2勝をあげた方が勝者となる。勝敗が決すると、再びレスリングのように試合場中央で審判が両者の手を取り、勝者の方を挙げることによって勝ち名乗りを宣告する。

審判は登場する選手を面白可笑しく紹介し、また冗談なども交ぜながら取組を進める。真剣勝負の連続というよりは、むしろ大相撲の初切のような滑稽さが笑いを誘う。

10組ほどの取組が終わると、次は3人勝抜戦となる。勝抜戦では仕切りはなく、審判が「何人目」と宣告し挑戦者を募り、挑戦者が勝ち残っている選手に飛び掛って行くことによって始まる。

国民小学生の対戦は30分ほどで終わり、次いで、国民中学生の取組となる。服装は同様に上半身裸、裸足である。試合場に整列し、礼と握手を交わした後、12組の対戦がおこなわれた。仕切りは両手の握り拳をしっかりと地面つけたまま、中腰の姿勢で静止する。やはり腰高の状態であり、その姿勢は日本相撲を見慣れた目からみればいわゆる「へっぴり腰」と写る。攻め方、勝敗の決着の仕方は国民小学生と同様である。立合は日本相撲のマワシにあたる物がないので、腰部に腕をまわして組み合うことはなく、もっぱら腕を身体の前に突き出しての押し合い、突き合いや互いに指を組み合わせての力比べから始まる(写真30)。投げやタックル、押し倒しなどによって相手を完全に倒すと勝ちとなる。試合場から外に身体が出た場合は、いったん試合場中央に戻って再開される。3本勝負、3人抜きと続き国民中学生の試合は午後5時頃に終わった。

試合場の整備がおこなわれ、10人ほどが試合場に上がり、つま先で地面を掘り起こすようにして、固まった表面を軟らかくする(写真31)。

整地を終えると、高級中学生の試合となる。上半身裸で裸足には変わらないが、配られた白い長いタオルを腰に一重に巻いて締める(写真32)。結び方はまちまちである。このタオルがマワシの役割を果たすことで、運動形態や身体技法も様変わりする。拳を着き、審判の「ハジメ」の合図で立ち上がると、互いの腰に巻かれたタオルをつかんで四つに組むようになる(写真33)。そして、組み合った状態から、相手の足を払ったり刈ったり、持ち上げて投げたりの攻防がなされる。これまでは相手を倒すことが目的だったが、相手は勢よく試合場の外に押しだすこ

写真18 試合場を足で整える

ようになる。但し、組み合ったまま、もつれて出たような場合には審判は野球のセーフのコールのように、両手を肩の高さで交差させてから広げるジェスチャーを数回繰り返して勝敗は認めない。その場合には、中央に戻って仕切り直しとなる。仕切りで陸上競技のクラウチング・スタートの姿勢のように、片足を下げて構える者もみられる。

高級中学生の試合は投げ技で豪快に決まることが多い。相手の上腕を掴んだり、腰に締めたタオルを掴んでの投げ、あるいは足を払ったり、刈ったりして相手を倒すなど、明らかに柔道の技と認められる。そこでは払腰、内股、大内刈、掬投、裏投、俵返、燕返など多種多様なキレ味鋭い技をみることができる。

(写真 34)。いわば、砂の上で立ち技勝負に限定した柔道をおこなっているともいえよう。この背景には彼らのスポーツ経験が色濃く反映している。知本国民小学は台湾でも有数の柔道及びレスリング強豪校であり、国立台東大学体育高級中学へ進学し柔道隊に所属している者も少なくない。

3本勝負、3人抜きを終えると、3人抜きを達成した3名を試合場の上にあげ、審判が片手を持ち上げながら紹介する(写真 35)。これで競技は全て終了し、観戦していた人々も散会する。

2005年 は国民小学生、国民中学生、高級中学生の取組だけであったが、2004年にはこの後に青年会員、そして子どもたちの父親などの大人の対戦がおこなわれた。彼らの世代を指して、知本日本語では「セイネン」(青年)、あるいは「シャカイジン」(社会人)と呼ぶ。審判は日本語世代が務め、時には立合からしっかりと手をついてから取り組む日本相撲の作法の指導がおこなわれたが、出場者のほとんどが朝から米酒などのアルコール類をたしなんでおり、真剣勝負というよりは余興といった感であった。

また、2004年では各取組の勝者にトウモクより賞品が手渡されていたが、2005年は無かった。

## (2) 知本相撲の特徴

2004年、2005年におこなわれた知本相撲の特徴について、ここで整理しておく。

### 1) 名称

知本相撲は漢語で「摔角競技」と表記されるが、知本日本語で「スモウ」やカティプル語で「マリウオリウオス」または略した言い方で「マラリウオス」など、さまざまな名称でもって呼ばれる。このように、日常会話の中でごく一般的に多言語が用いられていることは当該社会の複雑な歴史的経験を象徴的に表しているといえよう。

競技進行は北京語でおこなわれるが、そこには少なからず日本語、あるいは日本の文化的影響を認めることが出来る。審判の「カマエテ」、「ハジメ」、「イ

ッポン」等である。

また、観衆から「ショーブ、シューブ、ショーブ」と声が掛かることがある。同体に倒れた時などの勝敗がはっきりしない場合や相手を押し出した際に連呼されることから、勝負の決着を認めず、最勝負を要求する言葉として用いられている。すなわち「再勝負」の知本日本語といえよう。

## 2) 試合場・服装

試合場の造成は青年会に委ねられており、海岸から運び込んだ砂によって作られるが、大きさは年によってかなりの違いがあるという。円形の試合場故に日本相撲の「土俵」を連想させるが、「土俵」を構成する重要な要素である方位は特には意識されておらず、「四本柱」またはそれに代わる「房」や「力水」、「清めの塩」もない。また、円周は日本相撲のような勝負俵によってではなく、外縁を一段高くすることで規定されている。2004年は、試合場の上には日除けのための黒い網が張られて、一見すると四本柱と屋根の日本相撲の雰囲気醸し出していた（写真36）。

大きさも約6メートルと、日本相撲の4.55メートル(15尺)と比べると1メートル以上も大きい。これによって、相手を押し出そうとしても場外際で回り込まれて、容易には押し出すことができない。よって、押し出しよりも倒したり、投げたりといった技の方がより効果的となってくる。また、表面が非常に軟らかく、踝までが沈み込む状態であることも、日本相撲と大きく異なる。足の運び方も日本相撲の基本とされる「すり足」は不可能であり、全て「歩み足」となる。よって、この試合場の大きさと表面の状態が知本相撲における技や運動形態を特徴付けているといつてよい。

服装は平服である。収穫祭においては精神舞や晩餐などの際には伝統的衣装に身を包むが、マラソンとこの知本相撲に限ってはそれがない。裸足でおこなうが、特に意味があるとはいえないだろう。審判が靴をはいたまま裁くこともあり、試合場では裸足であらねばならないといった決まりはないといえる。むしろ、上半身裸と裸足は生活習慣によることの方が大きいと思われる。

マワシについては、2004年は国民中学生から大人まで、2005年は高級中学生のみが白色の長いタオルを腰に締めた。このことは、締めるという行為が知本



相撲そのものと直接的に関わるものではなく、年齢階梯制と結び付いていること、すなわち知本相撲を取るためにマワシとするのではなく、年齢階梯制に基づくものであることを教える。

マワシ代わりのタオルを締めることによって、運動形態や身体技法も変化を見せた。すなわち、マワシを掴んでの展開が多くなり、投げ技が決まりやすくなったといえる。その一方で、マワシを掴まないことも少なからず見受けられた。これは知本相撲の運動形態において、マワシのもつ意味が日本相撲と同一ではないこと示している。

### 3) ルール

ルールは日本相撲と同様と言っても過言ではない。

相手の足裏以外の身体を地面に着けるか、もしくは相手の身体を円形の試合場の外に出すことによって勝ちとなる。ただし、全ての取組においてこのルールが厳密に適用されているとは言い難い。国民小学生、国民中学生では、手が地面に触れた、あるいは着いただけ、また、一方が試合場から出ても負けとはならない。高級中学生、大人の場合でも、その判断は審判の裁量に大きく委ねられている。

押し出しや寄り切りとなっても、再び場内に戻ってそのまま試合が継続する場合もあることから、円形の試合場が日本相撲における「土俵」としての積極的な意味を有していないようにも見受けられる。これは、押し出しや寄り切りよりも、投げ技の方の評価が高く、また豪快な技が決まることが好まれることによるものと理解できるのではないだろうか<sup>21</sup>。

ここで重要となるのは、相手を試合場の外へ押し出すという身体的行為やそれによって勝敗を決するというルールではなく、それを意味付ける文化的枠組み、すなわち文化コードとしての「土俵」の存在である。定められた領域「内」に位置する他者を領域外「外」へ放逐することによって勝ちとなる。「土俵」において、内外の区別意識が明確になっていることである。

相撲における土俵コードとしての文化的枠組みは、従来の研究史において日

---

<sup>21</sup> 同様の理解として、筆者の経験する柔道の例では練習試合等にて、「一本」以外の技のポイントは全く認めずに、「一本」で決まるまで勝負をおこなうことがある。

本相撲以外に無く、これによって日本相撲が特徴付けられるとされてきたが<sup>22</sup>、知本相撲においてもそれが見られるのである。

審判は有志の1人が務めるが、その裁き方は特に定まっていはいない。いずれも平服で、靴を履いたままでホイッスルを吹きながらレスリング方式でおこなう者(写真37)、また「ハジメ」と声を掛け、投技で勝敗が決すると「イッポン」と宣告し片手を挙げるジェスチャーをする柔道方式の場合もある。このことは、審判法についての共通認識が存在していないことを表している。

また、抜勝負では毎回、勝名乗りをあげない。調査者の経験する柔道における理解では、掛り稽古などの場合は勝者の宣告を省くこともあるが、試合においては勝者の宣告を欠くことはない。よって、それをおこなわない点は知本相撲の特徴の一つにあげられるであろう。

#### 4) 技術

知本相撲は素人の手によっておこなわれる相撲であり、特徴だった技法や運動形態はうかがえず、選手個々のスポーツ経験を反映したものとなっている。柔道経験者は柔道における体の捌きと技、レスリング経験者はレスリングの身体動作をとった具合である。

先述したように、試合場の大きさと表面の軟らかさが知本相撲における有効な技を規定しており、それと各自のスポーツ経験とが相まって、豪快な決まり技につながっている。さらには③で述べたように技の価値が押し出しや寄り切りよりも投げ技に置かれ、投げ技で豪快に決することを好む志向が相乗効果をもたらし、結果として知本相撲の運動形態が形成されているということは指摘できよう。

日本相撲の場合、「押さば押せ、引かば押せ、押して勝つのが相撲の極意なり」または「押すに防技なし」と「出し技」が根本に謳われているが<sup>23</sup>、知本相撲では投げ技に重点が置かれている。このことは知本相撲を特徴付ける大きな点であるといえる。

<sup>22</sup> 渡邊昌史(2003)世界各地の相撲&民族レスリング、2004「総合&組技格闘技」選手名鑑、日本スポーツ出版社：東京、pp.244-245。

<sup>23</sup> 佐渡ヶ嶽高一郎(1941)相撲道教本、大日本教化図書、東京、pp.13-14。

仕切りは、2005年は拳をしっかりと着けた状態から始めていたが、2004年は「全然なっていない」として、ヒロシ<sup>24</sup>氏が試合場に上がり、実際に腰を落とし、しっかりと手を着く仕草を見せながら立合の仕方を教え、そのまま審判を務めた（写真38）。

日本語世代など、日本相撲を知る人々にとっては仕切りの際に互いに頭を接した状態とするのは違和感を禁じえなかったようで、『残った』では始める時、こう頭が近すぎるでしょ。もっと離れないと」と鳥井氏は語っていた。このことは「残った」という言葉と仕切りの状態から、明らかに日本相撲を念頭においてのものであろうことを教える。

## 5) 儀礼性

儀礼性は先立っておこなわれたパリシ（伝統的祭祀）以外、知本相撲そのものには特に認めることはできない。また、日本相撲の四股やそれを想起させるような身体動作もおこなわれていない。

特筆されるのは2005年、トウモクによるパリシの際に、試合場に「塩」が撒かれたことである。

知本には3人のトウモクがいるが、知本相撲のパリシをおこなったのは今春新たにトウモクとなった、マバリユウの林文祥氏（原名：シヨ）、45歳であった。しかし、まだパリシを明確に継承してはいないので、その傍らで林大明<sup>25</sup>氏（日本名・イノウエマサイチ）、81歳が「トウマラマウ<sup>26</sup>」（呪文）を唱えながら執り行っていた（写真39）。「イナシ<sup>27</sup>」と共に塩を一掴みずつ数回、試合場の上に撒いた。

この「塩」を伴うパリシは、2004年の知本相撲には見られなかったことであり、さらには収穫祭に関わるさまざまなパリシのなかで「塩」を用いるのは唯一、知本相撲の時だけである。

<sup>24</sup> 1941年生、父親は日本統治時代の「警丁」（日本人警察の補助）。「姉さんと妹、3人が日本にいる（嫁いで）。「相撲はおじさんに習った」。

<sup>25</sup> 長男が知本相撲の審判を務めた。

<sup>26</sup> 「子どものころ年寄りについて行って覚えた」という。

<sup>27</sup> 数ミリの茶色い米粒状のものであり、陶片とも錆びた鉄鍋のかけらともいわれる。

パリシとは伝統的な神<sup>28</sup>に祈る行為である。マラソンの際のパリシについて、鳥井氏は次のように語った。

私らがこうやって(イナシを撒く素振り)、それで天の神とお話しをする。ケガや事故が起きませんようにとお願いをする。私らがこうやってするから、無事に出来る。

事実、知本相撲でパリシをおこなわなかった2004年、鳥井氏の長男が頸椎を捻挫する事故が起きた。

---

<sup>28</sup> 知本日本語で「高砂の神様」という。

リシ<sup>5</sup>」(伝統的祭祀)に関わる部分のみを執り行っているが、かつては粟の播種から間引き、収穫、食用に至るまで、生産過程に伴うさまざまな祭祀一切をトウモクが全て取り仕切りっておこなっていた。トウモクが祭祀をおこなわれなければ、粟生産に係わるすべての作業、そして食べることも一切許されなかった。トウモクによる祭祀について論じることは本研究の目的ではないので、ここでは収穫祭の理解にとって重要と思われる祭祀のみを概略する。

収穫祭の運営経費は知本プユマー家族あたり500元<sup>6</sup>を徴収するとともに、台東州政府や台東市の首長・議員など政治的地位にある人からの寄付に多くを依っている。寄付は公職選挙を控えた時には高額となる反面、選挙の実施されない時には少なく、文化発展協会は資金繰りに苦心している。

収穫祭は「卡地布多功能活動中心」を会場にして開催される。卡地布多功能活動中心には文化発展協会の本部がおかれ、知本の社会・文化活動の拠点となっている。この地は日本統治時代には知本公学校(1941年から知本国民学校)があり<sup>7</sup>、第二次世界大戦後はそのまま中華民国の知本国民学校(現在の国民小学)に引き継がれ、1949年に移転するまで学校があった。その後、荒地となっていた場所を文化発展協会が1990年代に政府より払い下げと補助金を受け、「卡地布部落文化園區」として徐々に環境を整備してきている(写真4)。

この地は、日本語世代にとっては日本統治時代の「記憶」が集約されている場でもある。

卡地布多功能活動中心には、漢語で「把拉冠」と表記されるパラクワンが復元されていることから、知本ではもっぱらパラクワンと呼ばれる(写真5)。よって、知本においてパラクワンとは狭義では男子集会所の建物を指し、広義にはそれが置かれている土地や空間を含めた総称として用いられている。

収穫祭は毎年7月11日から18日まで、8日間にわたっておこなわれている。

<sup>5</sup> 知本日本語では「まじない」という。

<sup>6</sup> 日本円で約1700円(2005年7月現在)であるが、物価の問題、または知本の経済状況により単純には比較できない。

<sup>7</sup> 日本から運ばれた檜によって切妻屋根の玄関をもつ校舎が建てられていた。戦後、進駐してきた国府軍の兵舎となったが、不審火により消失。近年まで公学校時代の国旗掲揚台(写真6)が残されていたが、2004年のパラクワン整備にともなって撤去された。「記念だから残してくれっていったのだけど」とは汪先生の弁。

以下、この期間に実施された行事を時間軸に沿って詳述する。

### 【7月11日】

第1日目。文化発展協会の役職者、青年会員、知本プユマの高級中学、国民中学、国民小学（それぞれ日本の高校生、中学生、小学生に相当）の生徒・児童がパラクワンに参集し、文化発展協会総幹事、青年会長の指示のもとに準備を始める。

また、この日より期間中（7月17日朝まで）、知本プユマの高級中学生、国民中学生、国民小学生はパラクワンに泊り込み、スパルタ式訓練を伴う集団生活をおこなう<sup>8</sup>。精進潔斎など特に禁忌はない。また、参加は個人の自由意思に委ねられており、興味・関心が無い場合には参加しないこともある。「夏休み期間の子どもたちはみんな楽しみにしている」（汪先生）一方で、少なからず不参加があることもまた事実である。

泊まり込んでいる彼らの食事<sup>9</sup>の支度は婦女会長が中心となって準備にあたり、2005年は「原住民文化」のフィールドワークに訪れた女子学生の一団がサポートしていた。パラクワンの建物自体は女人禁制であるものの、そこを一步出たパラクワンの敷地には少なからず同年齢の女性がおおり、平服でジャージ姿の青年男女が談笑する様相はむしろ和やかな雰囲気をかもし出しており、一見するとサークル・課外活動の合宿訓練のようでもある。

夜には日本語世代など、年長者による卡地布の歴史や文化に関する講話がおこなわれる。

### 【7月12日】

第2日目。早朝、パラクワンで集団生活中の高級中学生、国民中学生、国民小学生が上半身裸となり、2列縦隊を組み走って集落を巡回する。この際、高級中学生、国民中学生は左手にブリキで出来た細長い鐘を、右手に木製のバチを持ち、調子を合わせて叩きながら走る。これは走ることによる心身の鍛錬としての意味合いの他、収穫祭が近づいたことを知らせるものであり、この鐘の

<sup>8</sup> 広報媒体などにも「斯巴達式軍事訓練」として特に強調されている。

<sup>9</sup> 期間中の食事に供するために、ブタ2頭を購入し、同地で屠り解体した。

音は収穫祭の風物詩ともなっている（写真7）。

鐘の音について、汪先生は語る。

今はただ叩いているだけだけど、昔は鐘の音の高低がもっとはっきりしていた。部落間のいざこざも（話し合いではなく）鐘を鳴らしてのやりとりで解決していた。他の部落へ伝令として走らせたときも、(伝統的衣装の)腰に付けている鈴（写真8）の音を耳にすれば、話しを聞かなくともどこの部落のものか、悲しい知らせかそれとも嬉しい知らせかどうかわかったものだ。今の子どもたちはそんなこと知らないし、出来ない。

この日は、「タリヌグ<sup>10</sup>」（写真9, 10）をパラクワンに掲げ立てることが重要な行事である。タリヌグとは藁や竹、檳榔などで人形を作り、それを一本竹の先に付けて掲げ建てることである。これには2つの意味がある、一つは収穫祭の始まりを告げること。集落内はもとより、発祥神話では姉の子孫にあたり、山側に遠望する位置にある建和集落に「収穫祭が始まるから、今年も遊びにきなさい」と知らせる意味もあった。二つ目として、かつては知本には3系統それぞれのパワクワンがあり、流木集め競争、相撲の対抗戦がおこなわれていた。これに勝利したパラクワンが立てることを許された勇者の証でもあった。

タリヌグは青年会員、高級中学生、国民中学生らによって作られ、意匠も任されている。板に絵を描いたり、藁人形に着物を着せたり、裸のままであったりと年によって様々であるが、特徴としては発祥神話で弟の子孫といわれているため、男性のシンボルをことさらに誇張させた姿となっている。

人形を作り、知本山の麓から切り出してきた竹に付けて掲げる頃には日暮れを迎えている。竹を立てる際にはトウモクによるパリシがおこなわれる。

夕方には、朝と同様に高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回し、夜には収穫祭の由来の講話や伝統歌謡の練習がおこなわれる。

## 【7月13日】

<sup>10</sup> 漢語表記「精神圖騰」。

第3日目。前日と同じく早朝に高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回する。彼らはこの日断食するとともに、唐辛子入りの水を飲み、ニンニクの汁を唇に塗布される試練に耐えなければならない<sup>11</sup>。また、各家においても収穫祭に向けての準備が始まる。「ピナルポック<sup>12</sup>」(米餅)を作るために必要な月桃の葉などを山野に採集に行く。

午後は、パラクワンで会場設営にあたる。夕方には、高級中学生以下が鐘を叩きながら、そして、青年会の軽トラックが「青年会伝唱歌謡<sup>13</sup>」を拡声器から流しながら集落を巡回し、収穫祭のはじまりを知らせる。集落の人々は戸外で夕涼みしており、この鐘と街宣によって、収穫祭の訪れを実感する。

夜には、明日からの本格的な祭に向けての訓話や伝統歌謡の練習がおこなわれる。また、期間中の夜には、パラクワンにてスパルタ式訓練の一環として、寝かせた国民中学生の尻を木の棒で力強く叩くこともおこなわれる。これはかつて、伝統的年齢階梯制における通過儀礼の一つであった。

### 【7月14日】

第4日目。この日から本格的な収穫祭を迎え、主要な行事が執り行われる。2004年、一日の始まりに汪先生は「祖先を敬う、団結、感謝」の3項目を大切にするように青年たちに語った。

はじめに「馬拉松体能競賽」(漢語)である。カティプル語では「ブンカス」であるが、今日のこのように呼ばれることはなく、もっぱら「マラソン」という。パラクワンから発祥地とされるルブアーンまで、高級中学生、国民中学生、国民小学生が徒競走をおこなう。距離は往復で5から6キロメートル程度である。海岸沿いのなだらかな舗装道路が続くが、台東と高雄を結ぶ幹線道路でもあり、大型車や時速100キロ以上の自動車の往来が多いため、青年会員や保護者などがオートバイや自動車にて伴走し、交差点などでは交通誘導に務めサポートする(写真11)。

2004年はパラクワンからルブアーンまでの全行程を走る訳ではなかった。午

<sup>11</sup> 台東県卡地布文化發展協會(2005)卡地布小米収穫祭。

<sup>12</sup> 漢語表記「卑南粿」。

<sup>13</sup> 知本プユマが中心となって結成された音楽ユニット「原住民部落工作隊」によって、CD化され、一般にも販売もされている。



前6時にパラクワンをスタートし、1キロメートルほど走った後に指示に従って伴走のトラックの荷台に乗り込み移動した。そして、ルブアーンの手前で自動車から飛び降り、再び走り出してルブアーンまでの僅かな距離を走ってゴールした。実際に走る距離よりも、自動車で移動した距離の方が長いという徒競走であった。これについて、トウモクの鳥井氏は言う。

以前はパラクワンで7日から1週間の断食をして、それから走っていたが、断食も今は一日だけ。それもやっているか？（以前は）4時にスタートして、パラクワンまで走って行って、向こうで相撲をとっていた。その帰りが正式の競走で1着から3着までを決めていた。

というのはね、（全行程を走らせないのは）今の子どもは体力がないから走らせられない。だから自動車に乗せている。事故があるといけないから。裁判になるとトウモクでも（公権力には）かなわない。台湾はすぐに裁判にするから。

一見すると、走る速さを競うという本来的な意味での徒競走とはかけ離れた行為にも映るが、これをおこなう意味が「競争」よりもむしろ「固有伝統文化」を「経験」させることにその重きがおかれていることを教える。

ところが、2005年ではこのマラソンの様相が一変した。パラクワンをスタートした後、自動車に乗り込むこと無くルブアーンまで完走したのである。国民小学生、国民中学生は往路のみの競走であったが、高級中学生にはさらに帰路も走ってパラクワンに戻らせ、着順を決めて上位を表彰した。このように、マラソンにおける自動車での移動を止め、実際に走らせたことは「固有伝統文化」としての真正性を高めるものであったとみることができる。

往路、到着したルブアーンでは、2004年は年長者から発祥伝承が記されている石碑（写真12）についての説明がなされただけであったが、2005年は青年会によって砂浜でトレーニングを兼ねたレクリエーションがおこなわれた。これも年によって異なり、綱引きがおこなわれたこともあった。

午後からはパラクワンにて男子による知本相撲がおこなわれるが、これについては次節で改めて述べることにする。

夜は、卡地布多功能活動中心に女性が参集して花環作成に取り組む。漢語で「花環及編花競技」と表記されるものの、実際は競って作るというより、むしろ大人が子どもを指導しながら一緒になって作成する。これは、収穫祭における「固有伝統文化」の女性による継承とみることができる。この花環は収穫祭や狩猟祭など、ハレの祭祀儀礼の際に女性から男性に贈られ、頭を飾るものである（写真13）。

### 【7月15日】

第5日目。早朝、高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回する。午前中、各家より定められた個数の餅、ビール、米酒などがパラクワンに納められる。これらは期間中に会場で振舞われる。原則的に物納であるが、現金でこれに代える事も出来る。かつては青年たちが一軒一軒まわりを回りもち米を、無ければ粳米を集め、もち米は餅に、粳米からは米酒を造っていた。

昼には「伝統年齢階級餐会」（漢語）が催される。伝統的衣装<sup>14</sup>で正装し、腰に「蕃刀<sup>15</sup>」を下げた日本語世代や大人がパラクワンに集まり、年代ごとに食卓を分けて食事をする。知本社会において、文化として価値づけられている規範的行動の一つに年長者を絶対的に敬うということがあげられる。食事会においても、高級中学生、国民中学生などは大人の接待にまわる。

午後は、伝統的衣装の青年会員、高級中学生、国民中学生、国民小学生が「精神舞」（漢語）にて集落を巡回する。パラクワン建物の入り口に下げてある人形の鐘を先頭にして打ち鳴らしながら（写真14）、年長者から長幼の順で隊列を組み踊りながら進む。右手に大きな葉を持ち、左手に卡地布の色である黄色のタオルを持ち、両手を前後に大きくゆっくり振りながら、大股で腰を落として歌いながら進む。カティプル語で「プトガル」と呼ばれるこの踊り方は、まだ山麓に居住していた時代に、収穫した粟を担いで山へ運んだ姿を表しているという（写真15）。

知本集落の路地をくまなく巡るが、途中、前方で爆竹が打ち鳴らされるとそ

<sup>14</sup> 今日では布に刺繍で装飾が施されたものとなっているが、かつては鹿皮で出来ていた。

<sup>15</sup> 知本日本語で「蕃刀」（ばんとう）、あるいは「刀」（かたな）という。木や竹の加工・細工に、または肉を加工したりと、利便性が高く実用的なものである。

ここで前進を止め横隊となり、両手を前で交差させ左右の人と手を繋ぎ円陣を組み、左回りに回りながら踊る（写真16）。歌いながら数週廻り踊ると、青年会長の独唱となり、全員で掛け声を掛けながら、一端しゃがみ込むように低く腰を落とし、それから高く跳ね上がる（写真17）。この跳躍を数回繰り返して一区切りとなる。餅や米酒、ビールなどでもてなす家もある。音楽は付き随うトラックに備え付けられたスピーカーから大音量で流されている。

汪先生はこの精神舞に目を遣りながら語った。

今は爆竹が鳴ったところで休んでおるけどね、爆竹は中国になってから、中国の影響でこうなった。日本当時は部落中を休むことなく黙々と廻っていた。踊り方ももっとぐっと腰を落として、地面に着くくらいまで、そこから跳ね上がっていたよ。歩くのではなく、跳んで部落を廻っていた。だから、非常に疲れた。それに比べて今は。みんな中国の影響。

爆竹は光復<sup>16</sup>後における「中国化」の影響として、また、ここでもマラソンと同様に実体験と重ね合わせての身体動作の簡略化を嘆く語りが聞かれる。

精神舞が集落の巡回を続けるなか、パラクワンでは晚餐会の準備が始まる。午後6時30分、数百人分の円卓が用意されたパラクワンには、知本プユマや来訪者が年齢別あるいは家ごとに着席し会食となる。パラクワンの空いたスペースには舞台やぐらが生まれ、婦女会有志による舞踊の披露やのど自慢大会が繰り広げられる。この晚餐会は「日本の正月と同じ。今日は知本の正月」と形容される。料理が無くなり次第、三々五々家路に着く<sup>17</sup>。

午後8時頃からは、ライトで照らされているパラクワンの広場で招待された人も一緒になっての大人から子どもまで男女一緒の踊りの輪が出来き、夜更けまで続く。音楽は先のCDがスピーカーで流される。また、踊りがおこなわれ

<sup>16</sup> 漢語で自民族の土地・人民を取り戻すこと。祖国復帰。

<sup>17</sup> 2004年の翌朝、日本語世代から語りかけられた。「(晚餐会で)食事を残したり、酒を捨てる人がいた。食事を残しても捨ててしまう。昔はこんなこと無かった。日頃は節約して、收穫祭の時に…。肉串1本でもごちそうで、酒を飲んだ。今は金持ちになったが…。日本はそうではないだろ」。そこには現実と過去(日本統治時代)を対比させ、現実を否定する一方、理想としての過去をみる眼差しが存在していることを教える。

る夜には、パワクワン脇の公道 50 メートルほどに露天が立ち並ぶ。

### 【7月16日】

第6日目。早朝に高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回する。

午前、トウモクが栗餅を作り、それを祖霊に供えるパリシがおこなわれる。カルマアンで栗餅を作り（写真18）、それを持って知本溪に行き、はじめに山に向かって狩猟の感謝を、次いで川にて栗餅を「船」に乗せ流し、知本溪が流れ注ぐ先に位置する火焼島（現、緑島）へ送り届ける。これは、栗が火焼島から伝来してきたという伝承に基づくものである。もともとは川海老を捕まえて、その触覚に栗をつけておこなうものであったが、今日では木の枝と米酒のペットボトルで代用している（写真19）<sup>18</sup>。これを川に流し、トゥマラマウ（呪文）を唱える。

午後からは精神舞の温泉街巡行がおこなわれる。日本統治時代からの保養地として名高い知本温泉は、知本集落よりやや奥まった知本山の麓に位置している。近年では、日本からも多くの観光客が訪れ、RCホテルは台湾でも屈指の集客力と賑わいで知られている<sup>19</sup>。知本温泉は知本溪に沿って温泉旅館や飲食店が温泉街を形成しており、知本の人々にとってはそこで働くことが数少ない現金収入の道となっているとともに、「温泉で働いている」ことが一種のステータスとなっている感さえある。

午後4時30分、青年会員、高級中学生、国民中学生が乗用車、オートバイ、トラックに分乗して、拡声器から伝統歌唱を流す車を先導にしてパラクワンを出発して温泉街へ向かう（写真20）。途中、温泉の手前にある知本プユマの新興住宅地に立ち寄り精神舞を踊る。温泉街に着くと原住民が経営している原住民料理のレストランの前で踊り（写真21）、すぐにまた元の道を引き返し、別の新興住宅地で踊る。かつてはRCホテルまで行き踊っていたこともあったが、2005年は温泉街の入り口までであり、温泉街巡行という趣旨においては形骸化している。「温泉から来てくれと言われていて、行くと喜ばれるから」と建前では観

<sup>18</sup> この下流で水量のほとんどが農地灌漑用に取水され、川の流れは途絶える。これによって、かつては生き物の豊富な河川であったが、今日ではまったく見られなくなっている。

<sup>19</sup> しかし、一頃の国内旅行のブームが去り、台湾人観光客は「大陸や日本へ行ってしまつて」寂れた感が否めない。

光のためとしているものの、寄附を得るため、あるいは寄附を受けての形ばかりのお礼巡行としておこなわれていると推測される。

よって、この温泉街巡行は温泉街あるいは観光客という客体を意識してのものではなく、温泉の方まで広がった集落全体を巡行するため、すなわち知本プユマ自身のためにおこなわれているといえる。

夜には、パラクワンにて伝統的舞踊や歌が披露される。台北に居住あるいは出稼ぎに出ている知本プユマも帰省し、その友達なども集い、伝統的衣装での踊りの輪のなかに平服姿も入り交じって夜更けまで踊る。

### 【7月17日】

第7日目。早朝に高級中学生以下が鐘を叩きながら集落を巡回する以外、日中は特に行事はない。

夜から翌朝まで夜通し歌い踊り、収穫祭はフィナーレを迎える。夕刻より、伝統的衣装に身を包んだ人々がパラクワンに集まり、男女一緒での舞踊がおこなわれる。午後9時頃になると、カルマアンの前で各系統（マバリユウ、パカロク、ルバニャオ）に分かれて餅つきがはじまる（写真22）。若者が手杵（柄の無い杵）と臼で蒸したもち米をつき、女性がそれを丸め、きなこをまぶす。ついた餅は配られ空腹を満たすほかお土産ともなる。この餅は吉祥物として扱われている。

餅をつき終わると、夜が明けるまでの歌唱が続く。年長者、特に女性はこの機会を楽しみにしており、日暮れ前から子や孫に簡易ベッドを兼ねるイスを運び込ませ、席の確保をさせている。そして、このベッドに座り、時々睡眠をとりながら歌い楽しむ。伝統的な歌が歌われる機会は多くないため、記録化のために歌う女性を取り囲みテープレコーダーを回す知本プユマも少なくない。

伝統的な歌の独唱、そして歌垣のようにある特定のメロディーを声の高さで競い合いながら互いにやり取りすることも続く。伝統的な歌ばかりでなく、2004年では未明の数時間が日本統治時代の歌の数々「知本温泉の歌」、「(高砂) 義勇隊で出征する時に歌った歌」や当時の流行歌の歌合戦状態となった。その間、高級中学生、国民中学生は竹筒に入った米酒や水を注いでまわるなど、年長者の接待に心を砕く。空が白み始まる頃には、宴も自然散会となる。

2005年は未明に台風の接近が予想されたが、幸いにも直撃を免れた。「トウモクがパリシをしたから大丈夫」ということであったが、事実、太平洋上を西進して台東に向かっていた台風は上陸寸前で急転回し北へ進路を変えていた<sup>20</sup>。

7月18日、夜が明けるとトウモクは収穫祭を無事に終えたことを祖霊に報告、感謝するパリシをおこなう。その後、パラクワンの後片付け、清掃を終えると8日間続いた収穫祭は全ての行事を終える。

なお、2005年の大きな変化として、青年会主催のロックコンサートが催されたことがあげられる。7月18日、餅つきを終えた午後11時頃、突如、それまで暗かった特設ステージに強烈なライトが当てられると、伝統的衣装の知本プユマの若者たちによるロックが大音量で流れ始め、彼らの友人たちもステージの上下で歌い踊った。この間、歌い踊る若者たち以外の年長者はそれをただ眺めるか、もしくは仮眠をとっているかであった。この企画は収穫祭の準備会議で承認を得ており、知本プユマの若者たちによる、彼らにとっての「文化」の表象とみることができよう。

このロックコンサートが「固有伝統文化」としての収穫祭を否定する意図によるものではないことは、終了予定の午前1時にピタリと終わると、若者たちは再びカルマアンの前に集まり、伝統的な歌唱が再開されたことが物語っている。

また、2005年の収穫祭期間中、高級中学生以下によって、適時パラクワンの清掃がなされた。これは、前年に次のような批判があったことと無関係ではないであろう。

祭の時にはワイワイやるが、済んだら片付けない。いくらパラクワンを

<sup>20</sup> この暴風雨は甚大な被害を及ぼした。後日、次のような語りがあった。

「30年前にも大暴風雨があり、田畑が持っていかれた（水に浸かって流された）。それを国民党が没収し、外省人に与えた。だから、原住民は貧乏。測量すると言って騙されて取られたこともある」。

「イナバ先生が亡くなった時も、ここ（知本）から大南までの橋を全部流した。カワムラ先生が亡くなった時も、温泉の橋、この辺りの橋を全部流した。みんな日本が作ったもの。中国にあげたくなかったんだって、みんなで話したよ（二人は原住民として始めて師範学校を卒業した名士的存在）」「中国じゃない、シナだ。一緒じゃない」。

つくったって、それじゃだめだ。注意すると反抗する。昔はトウモクが一  
言言えば、すぐに掃除したが。今のトウモクが言っても。

## 2 知本相撲

### (1) 知本相撲の実際

前節では収穫祭全体をみてきたが、本節では2005年収穫祭における「知本相撲」を実際の流れに沿って時間軸でもって詳述する。なお、知本相撲とは知本の収穫祭にて実修されている相撲を分析するために、筆者が立てた作業概念である。相撲という言葉を用いるのは、他ならぬ彼ら自身が知本日本語で「スモウ」(相撲)と表現することによる。収穫祭における正式名称は国語(漢語)で「摔角競技」である。

知本相撲を記述するにあたっては、競技特性やそれに伴う運動形態が類似する日本の相撲(以下、日本相撲とする)の諸概念を援用する。

知本相撲は7月14日の午後4時頃からパラクワンにておこなわれた。北回帰線の南側に位置する知本では真夏の陽射しは痛いほどである。人々の生活習慣も昼下がりの数時間は昼寝をして活動しない。よって、昼寝を終えてから三々五々パラクワンに集めた頃を見はからっておこなわれた。

試合場は円形で、砂によって直径約6メートル、高さ約30センチメートルほどに築かれている。一年のうちでこの時しか使用しないために表面が固まり荒れているため、事前に鍬やスコップで掘り起こして軟らかく整地しておく(写真23)。表面は突き固めずに軟らかなままとし、踝位まで砂に沈みこむ状態とする。2004年にケガ人が出た時「土俵が固いからだ」という意見があったことから、表面は軟らかいほうがよいとされていると思われる。

2004年は試合場の東側、2005年は西側に観衆席が設けられ、結果的にその方角が正面となった。観衆席だけでなく、試合場の周囲にも観衆の人垣が取り囲む。

進行を取り仕切るのは青年会であり、運営方法はマニュアル化され継承されている。競技は国民小学生から年齢順に実施され、審判は青年会員、もしくは

有志の大人が務める。

開会に先立ち、試合場の上でトウモクによるパリシ（伝統的祭祀）が執り行われる（写真24）。パリシは時間にして約5分ほどである。

はじめに国民小学生の試合である。平服のまま上半身だけ裸、裸足となっておこなう。20名ほどが2組に分かれて、試合場の中央に向き合うように整列し、正面と互いに立礼を交わし、次いで握手する（写真25）。

対戦する両選手は試合場の中央に立つ審判に招かれて入場する。日本相撲の四股、またはそれに類似する身体動作はみられない。レスリングのように、審判の左右に選手が並び正面に礼をする（写真26）。仕切りは両足を広げずにほぼ肩幅のままで、握り拳を身体の前方の地面に着けた状態で静止する。日本相撲のように一端腰を下ろし蹲踞した後に仕切るのではなく、立ち姿勢からそのまま前傾して、拳を地面に着ける。日本相撲の仕切りとは異なり、ほとんど膝を曲げることのない、いわゆる腰高の姿勢である（写真27）。特徴的なことは、審判が仕切った状態の両者の頭が接するように互いの身体を歩み寄せ近づけることである（写真28）。そして、審判が「カマエテ」と声を掛けながら、広げた掌を正面に指し出し、「ハジメ」と発声しながら手前に引くことによって始めとなる（写真29）。

試合展開は互いに指を組み合わせたり、相手の脚にタックルしたり、押したり、引いたり、あるいは左右に振ったりして相手を倒す。相手を完全に倒せば勝ちとなる。どちらかの選手が円形の試合場から外に出てしまった場合には審判の指示によって再度、試合場の中央から始める。3本勝負で競い、先に2勝をあげた方が勝者となる。勝敗が決すると、再びレスリングのように試合場中央で審判が両者の手を取り、勝者の方を挙げることによって勝ち名乗りを宣告する。

審判は登場する選手を面白可笑しく紹介し、また冗談なども交ぜながら取組を進める。真剣勝負の連続というよりは、むしろ大相撲の初切のような滑稽さが笑いを誘う。

10組ほどの取組が終わると、次は3人勝抜戦となる。勝抜戦では仕切りはなく、審判が「何人目」と宣告し挑戦者を募り、挑戦者が勝ち残っている選手に飛び掛って行くことによって始まる。



国民小学生の対戦は30分ほどで終わり、次いで、国民中学生の取組となる。服装は同様に上半身裸、裸足である。試合場に整列し、礼と握手を交わした後、12組の対戦がおこなわれた。仕切りは両手の握り拳をしっかりと地面つけたまま、中腰の姿勢で静止する。やはり腰高の状態であり、その姿勢は日本相撲を見慣れた目からみればいわゆる「へっぴり腰」と写る。攻め方、勝敗の決着の仕方は国民小学生と同様である。立合は日本相撲のマワシにあたる物がないので、腰部に腕をまわして組み合うことはなく、もっぱら腕を身体の前に突き出しての押し合い、突き合いや互いに指を組み合わせての力比べから始まる(写真30)。投げやタックル、押し倒しなどによって相手を完全に倒すと勝ちとなる。試合場から外に身体が出た場合は、いったん試合場中央に戻って再開される。3本勝負、3人抜きと続き国民中学生の試合は午後5時頃に終わった。

試合場の整備がおこなわれ、10人ほどが試合場に上がり、つま先で地面を掘り起こすようにして、固まった表面を軟らかくする(写真31)。

整地を終えると、高級中学生の試合となる。上半身裸で裸足には変わらないが、配られた白い長いタオルを腰に一重に巻いて締める(写真32)。結び方はまちまちである。このタオルがマワシの役割を果たすことで、運動形態や身体技法も様変わりする。拳を着き、審判の「ハジメ」の合図で立ち上がると、互いの腰に巻かれたタオルをつかんで四つに組むようになる(写真33)。そして、組み合った状態から、相手の足を払ったり刈ったり、持ち上げて投げたりの攻防がなされる。これまでは相手を倒すことが多かったが、相手は腰に巻かれたタオルをつかんで四つに組むようになる(写真33)。そして、組み合った状態から、相手の足を払ったり刈ったり、持ち上げて投げたりの攻防がなされる。これまでは相手を倒すことが多かったが、相手は腰に巻かれたタオルをつかんで四つに組むようになる(写真33)。

写真18 試合場を足で整える

よく試合場の外に押しだすことになる。但し、組み合ったまま、もつれて出たような場合には審判は野球のセーフのコールのように、両手を肩の高さで交差させてから広げるジェスチャーを数回繰り返して勝敗は認めない。その場合には、中央に戻って仕切り直しとなる。仕切りで陸上競技のクラウチング・スタートの姿勢のように、片足を下げて構える者もみられる。

高級中学生の試合は投げ技で豪快に決まることが多い。相手の上腕を掴んだり、腰に締めたタオルを掴んでの投げ、あるいは足を払ったり、刈ったりして相手を倒すなど、明らかに柔道の技と認められる。そこでは払腰、内股、大内刈、掬投、裏投、俵返、燕返など多種多様なキレ味鋭い技をみることができる。

(写真 34)。いわば、砂の上で立ち技勝負に限定した柔道をおこなっているともいえよう。この背景には彼らのスポーツ経験が色濃く反映している。知本国民小学は台湾でも有数の柔道及びレスリング強豪校であり、国立台東大学体育高級中学へ進学し柔道隊に所属している者も少なくない。

3本勝負、3人抜きを終えると、3人抜きを達成した3名を試合場の上にあげ、審判が片手を持ち上げながら紹介する(写真 35)。これで競技は全て終了し、観戦していた人々も散会する。

2005年は国民小学生、国民中学生、高級中学生の取組だけであったが、2004年にはこの後に青年会員、そして子どもたちの父親などの大人の対戦がおこなわれた。彼らの世代を指して、知本日本語では「セイネン」(青年)、あるいは「シャカイジン」(社会人)と呼ぶ。審判は日本語世代が務め、時には立合からしっかりと手をついてから取り組む日本相撲の作法の指導がおこなわれたが、出場者のほとんどが朝から米酒などのアルコール類をたしなんでおり、真剣勝負というよりは余興といった感であった。

また、2004年では各取組の勝者にトウモクより賞品が手渡されていたが、2005年は無かった。

## (2) 知本相撲の特徴

2004年、2005年におこなわれた知本相撲の特徴について、ここで整理しておく。

### 1) 名称

知本相撲は漢語で「摔角競技」と表記されるが、知本日本語で「スモウ」やカティプル語で「マリウオリウオス」または略した言い方で「マラリウオス」など、さまざまな名称でもって呼ばれる。このように、日常会話の中でごく一般的に多言語が用いられていることは当該社会の複雑な歴史的経験を象徴的に表しているといえよう。

競技進行は北京語でおこなわれるが、そこには少なからず日本語、あるいは日本の文化的影響を認めることが出来る。審判の「カマエテ」、「ハジメ」、「イ

ッポン」等である。

また、観衆から「ショーブ、シューブ、ショーブ」と声が掛かることがある。同体に倒れた時などの勝敗がはっきりしない場合や相手を押し出した際に連呼されることから、勝負の決着を認めず、最勝負を要求する言葉として用いられている。すなわち「再勝負」の知本日本語といえよう。

## 2) 試合場・服装

試合場の造成は青年会に委ねられており、海岸から運び込んだ砂によって作られるが、大きさは年によってかなりの違いがあるという。円形の試合場故に日本相撲の「土俵」を連想させるが、「土俵」を構成する重要な要素である方位は特には意識されておらず、「四本柱」またはそれに代わる「房」や「力水」、「清めの塩」もない。また、円周は日本相撲のような勝負俵によってではなく、外縁を一段高くすることで規定されている。2004年は、試合場の上には日除けのための黒い網が張られて、一見すると四本柱と屋根の日本相撲の雰囲気醸し出していた（写真36）。

大きさも約6メートルと、日本相撲の4.55メートル(15尺)と比べると1メートル以上も大きい。これによって、相手を押し出そうとしても場外際で回り込まれて、容易には押し出すことができない。よって、押し出しよりも倒したり、投げたりといった技の方がより効果的となってくる。また、表面が非常に軟らかく、踝までが沈み込む状態であることも、日本相撲と大きく異なる。足の運び方も日本相撲の基本とされる「すり足」は不可能であり、全て「歩み足」となる。よって、この試合場の大きさと表面の状態が知本相撲における技や運動形態を特徴付けているといつてよい。

服装は平服である。収穫祭においては精神舞や晩餐などの際には伝統的衣装に身を包むが、マラソンとこの知本相撲に限ってはそれがない。裸足でおこなうが、特に意味があるとはいえないだろう。審判が靴をはいたまま裁くこともあり、試合場では裸足であらねばならないといった決まりはないといえる。むしろ、上半身裸と裸足は生活習慣によることの方が大きいと思われる。

マワシについては、2004年は国民中学生から大人まで、2005年は高級中学生のみが白色の長いタオルを腰に締めた。このことは、締めるという行為が知本

相撲そのものと直接的に関わるものではなく、年齢階梯制と結び付いていること、すなわち知本相撲を取るためにマワシとするのではなく、年齢階梯制に基づくものであることを教える。

マワシ代わりのタオルを締めることによって、運動形態や身体技法も変化を見せた。すなわち、マワシを掴んでの展開が多くなり、投げ技が決まりやすくなったといえる。その一方で、マワシを掴まないことも少なからず見受けられた。これは知本相撲の運動形態において、マワシのもつ意味が日本相撲と同一ではないこと示している。

### 3) ルール

ルールは日本相撲と同様と言っても過言ではない。

相手の足裏以外の身体を地面に着けるか、もしくは相手の身体を円形の試合場の外に出すことによって勝ちとなる。ただし、全ての取組においてこのルールが厳密に適用されているとは言い難い。国民小学生、国民中学生では、手が地面に触れた、あるいは着いただけ、また、一方が試合場から出ても負けとはならない。高級中学生、大人の場合でも、その判断は審判の裁量に大きく委ねられている。

押し出しや寄り切りとなっても、再び場内に戻ってそのまま試合が継続する場合もあることから、円形の試合場が日本相撲における「土俵」としての積極的な意味を有していないようにも見受けられる。これは、押し出しや寄り切りよりも、投げ技の方の評価が高く、また豪快な技が決まることが好まれることによるものと理解できるのではないだろうか<sup>21</sup>。

ここで重要となるのは、相手を試合場の外へ押し出すという身体的行為やそれによって勝敗を決するというルールではなく、それを意味付ける文化的枠組み、すなわち文化コードとしての「土俵」の存在である。定められた領域「内」に位置する他者を領域外「外」へ放逐することによって勝ちとなる。「土俵」において、内外の区別意識が明確になっていることである。

相撲における土俵コードとしての文化的枠組みは、従来の研究史において日

---

<sup>21</sup> 同様の理解として、筆者の経験する柔道の例では練習試合等にて、「一本」以外の技のポイントは全く認めずに、「一本」で決まるまで勝負をおこなうことがある。

本相撲以外に無く、これによって日本相撲が特徴付けられるとされてきたが<sup>22</sup>、知本相撲においてもそれが見られるのである。

審判は有志の1人が務めるが、その裁き方は特に定まっていはいない。いずれも平服で、靴を履いたままでホイッスルを吹きながらレスリング方式でおこなう者(写真37)、また「ハジメ」と声を掛け、投技で勝敗が決すると「イッポン」と宣告し片手を挙げるジェスチャーをする柔道方式の場合もある。このことは、審判法についての共通認識が存在していないことを表している。

また、抜勝負では毎回、勝名乗りをあげない。調査者の経験する柔道における理解では、掛り稽古などの場合は勝者の宣告を省くこともあるが、試合においては勝者の宣告を欠くことはない。よって、それをおこなわない点は知本相撲の特徴の一つにあげられるであろう。

#### 4) 技術

知本相撲は素人の手によっておこなわれる相撲であり、特徴だった技法や運動形態はうかがえず、選手個々のスポーツ経験を反映したものとなっている。柔道経験者は柔道における体の捌きと技、レスリング経験者はレスリングの身体動作をとった具合である。

先述したように、試合場の大きさと表面の軟らかさが知本相撲における有効な技を規定しており、それと各自のスポーツ経験とが相まって、豪快な決まり技につながっている。さらには③で述べたように技の価値が押し出しや寄り切りよりも投げ技に置かれ、投げ技で豪快に決することを好む志向が相乗効果をもたらし、結果として知本相撲の運動形態が形成されているということは指摘できよう。

日本相撲の場合、「押さば押せ、引かば押せ、押して勝つのが相撲の極意なり」または「押すに防技なし」と「出し技」が根本に謳われているが<sup>23</sup>、知本相撲では投げ技に重点が置かれている。このことは知本相撲を特徴付ける大きな点であるといえる。

<sup>22</sup> 渡邊昌史(2003)世界各地の相撲&民族レスリング、2004「総合&組技格闘技」選手名鑑、日本スポーツ出版社：東京、pp.244-245。

<sup>23</sup> 佐渡ヶ嶽高一郎(1941)相撲道教本、大日本教化図書、東京、pp.13-14。

仕切りは、2005年は拳をしっかりと着けた状態から始めていたが、2004年は「全然なっていない」として、ヒロシ<sup>24</sup>氏が試合場に上がり、実際に腰を落とし、しっかりと手を着く仕草を見せながら立合の仕方を教え、そのまま審判を務めた（写真38）。

日本語世代など、日本相撲を知る人々にとっては仕切りの際に互いに頭を接した状態とするのは違和感を禁じえなかったようで、『残った』では始める時、こう頭が近すぎるでしょ。もっと離れないと」と鳥井氏は語っていた。このことは「残った」という言葉と仕切りの状態から、明らかに日本相撲を念頭においてのものであろうことを教える。

## 5) 儀礼性

儀礼性は先立っておこなわれたパリシ（伝統的祭祀）以外、知本相撲そのものには特に認めることはできない。また、日本相撲の四股やそれを想起させるような身体動作もおこなわれていない。

特筆されるのは2005年、トウモクによるパリシの際に、試合場に「塩」が撒かれたことである。

知本には3人のトウモクがいるが、知本相撲のパリシをおこなったのは今春新たにトウモクとなった、マバリユウの林文祥氏（原名：シヨ）、45歳であった。しかし、まだパリシを明確に継承してはいないので、その傍らで林大明<sup>25</sup>氏（日本名・イノウエマサイチ）、81歳が「トウマラマウ<sup>26</sup>」（呪文）を唱えながら執り行っていた（写真39）。「イナシ<sup>27</sup>」と共に塩を一掴みずつ数回、試合場の上に撒いた。

この「塩」を伴うパリシは、2004年の知本相撲には見られなかったことであり、さらには収穫祭に関わるさまざまなパリシのなかで「塩」を用いるのは唯一、知本相撲の時だけである。

<sup>24</sup> 1941年生、父親は日本統治時代の「警丁」（日本人警察の補助）。「姉さんと妹、3人が日本にいる（嫁いで）」。「相撲はおじさんに習った」。

<sup>25</sup> 長男が知本相撲の審判を務めた。

<sup>26</sup> 「子どものころ年寄りについて行って覚えた」という。

<sup>27</sup> 数ミリの茶色い米粒状のものであり、陶片とも錆びた鉄鍋のかけらともいわれる。

パリシとは伝統的な神<sup>28</sup>に祈る行為である。マラソンの際のパリシについて、鳥井氏は次のように語った。

私たちがこうやって(イナシを撒く素振り)、それで天の神とお話しをする。ケガや事故が起きませんようにとお願いをする。私たちがこうやってするから、無事に出来る。

事実、知本相撲でパリシをおこなわなかった2004年、鳥井氏の長男が頸椎を捻挫する事故が起きた。

---

<sup>28</sup> 知本日本語で「高砂の神様」という。

4



パラクワンと望楼



文化教育暨文物展示館



相撲の「土俵」

入口



カルマアン（伝統的祭祀小屋）



タコバコバン（少年集会所）

写真4 卡地布部落文化園區 概略図





写真5  
現在のパラクワン



写真6 日本統治時代の公学校の国旗掲揚台〔2003年〕



写真7 鐘を叩きながら走る〔2004年〕



写真8 バンサランの腰の鈴 [2004年]



写真9 タリヌグ [2004年]



写真10 パラクワンに立てられたタリヌグ〔2004年〕



写真11 マラソン〔2004年〕



写真12 ルブアーンの石碑。この地から台湾島に上陸したと伝えられる



写真13 狩猟祭にて、山から戻ってきた男性に女性が花輪を捧げる〔2005年〕



写真 14 人形の鐘を先頭にして進む [2004 年]



写真 15 プトガル [2004 年]



写真 16 爆竹が鳴らされると円陣を組んで踊る〔2004年〕



写真 17 しゃがみ込むように腰を落とし跳ねる〔2004年〕



写真 18

カルマアンでパリシのために栗餅を作るトウモク (2005年)



写真 19 パリシの準備 [2005年]





写真 19-2 パリシ [2005年]

フィールドワーカーの「邪魔者性」(「聖」なる方向から撮影する新聞記者)



写真 20 トラックに分乗して温泉街巡行へ向かう [2005年]



写真 21 温泉街で踊る〔2005年〕



写真 22 カルマアン前での餅つき〔2005年〕



写真 23 試合場を整地する〔2005年〕



写真 24 相撲に先立ってのパリシ〔2005年〕



写真 25 立礼を交わし握手する〔2005年〕



写真 26 審判を中央にして選手が並び「礼」〔2005年〕



写真 27 腰高の姿勢での仕切り（国民中学生の対戦）〔2005年〕



写真 28 審判は両者の頭が接するように近づける〔2005年〕



写真 29 「カマエテ」(高級中学生の対戦) [2005年]



写真 30 指を組み合わせての力比べの展開 [2005年]



写真 31 固くなった表面を足で軟らかくする〔2005年〕



写真 32 高級中学生からは腰にタオルを巻く〔2005年〕



写真 33 四つに組む〔2005年〕



写真 34-1 投げ技が豪快に決まる〔2005年〕





写真 34-2 相手を担ぎ上げて投げる〔2005年〕



写真 35 3人抜きを達成した3名〔2005年〕



写真 36 2004 年の風景



写真 37 レスリング方式の審判〔2004 年〕



写真 38 立合いの指導 [2004 年]



写真 39 パリシにて塩を撒く〔2005年〕